

ある女優

首藤 静夫

小学校の担任だったK先生が亡くなった。九十歳を超える長命で大往生だった。高峰秀子演じる『二十四の瞳』の「大石先生」のような慈愛にみちた先生だった。先生を偲び、高峰のエッセイを思い出して数冊読んだ。彼女は女優の傍らエッセイを書き綴り、出版物も多い。文章の一節がある大学の入試問題に使われ、当時話題となった。

高峰は大正十三年（一九二四）、函館に生まれた。幼時に養女として東京に貰われた。遊びに行った撮影所（松竹蒲田）で目をつけられて子役に抜擢され、以後立て続けに映画に出演、天才子役の名をほしいままにした。函館の実家が破綻し、彼女を頼って上京、十歳に満たない彼女が実家、養家十数人の家計を支えた。そのため高収入なのに貧窮に喘いだと書いている。

撮影が過密スケジュールで小学校にも満足に通えず、自宅と撮影所を往復するだけの毎日、移動中は眠りこけたらしい。

向学心に燃えた彼女だが、結局学業を諦め、その後は仕事を通して大人から知識や教養、マナーを学んだそうだ。

幼い頃からの映画育ちだが、映画界への思い入れは薄く、役柄を淡々とこなすだけだったと言う。先ほどの『二十四の瞳』にしても、

本当の主人公は子供たちと瀬戸内海の自然だから、自分は妙に色をつけず自然体で演じたと言う。大女優らしく勿体ぶって書くのかというと、さにあらず、どこか醒めている。

わが国初のフリー女優になったのが二十五才のとき。以後は脚本を選択し、他の活動と折り合いをつけながら女優業を続けた。

エッセイでは歯に衣きせぬ調子で、時に物議を醸したそうだ。圧巻が前回の東京五輪映画。市川崑監督の芸術的作品に、時の五輪担当相河野一郎氏が、これは委託した記録映画ではないと異議、大論争になった。彼女は市川監督を擁護する論陣を張り、最後には河野氏と市川監督の会談を取り持ち、河野氏に矛を収めさせた。

度胸といい行動力といい、最早一女優ではない。今の国会に欲しいくらいだ。